

## 個別報告

### 報告 1

#### マレーシア映画における食べ物、アイデンティティ、空間

チュー・フイヤン(愛知淑徳大学)

この研究は、民族間の関係を中心に展開するマレーシア映画『コンシ・ラヤ』(2022年)で使われた食べ物のメタファーの微妙なニュアンスを解き明かすことで、いくつかの問題を掘り下げる。

第一に、政治的緊張と、共に暮らし、食事を共にする異なる民族が複雑に絡み合う。『コンシ・ラヤ』の冒頭シーンでは、さまざまなマレーのお菓子やデザートが描かれている。これらには、ドドル、クイ・カピット、クイ・ロヤン、クイ・ロンパンが含まれる。また、旧正月によく食べられるサンバルシュリンプロールやみかんなどのスナックやフルーツも描かれている。マレー料理と中華料理の並置は、文化のハイブリッド化を提唱していることを示唆すると同時に、それらの独特の特徴と、多様なアイデンティティの中で一緒に暮らし、食べる多民族の本質を強調している。

第二に、国境を越えて移動するプロセスに関係する食べ物の起源である。シャリファとジャックの父親たちが料理コンテストに参加するとき、シャリファの父親であるラヒムは、発酵させたドリアンペーストであるテンポヤクを魚の味付けの調味料として使い、ロティ・ジャラを付け合わせとして使う。彼は高級フランス料理に似た方法で料理を提供するが、一方、ジャックの父親であるロングは魚の味付けにお茶を使用し、魚の頭を揚げ、肉のスライスを炒めるという3つの味の料理を作る。コンパオ風に揚げ、腹部を塩辛で蒸す。ラヒムとロングは、独特の料理アプローチを通じて、東洋と西洋の影響が地元の伝統とシームレスに調和し、常に進化するハイブリッドな食文化を生み出すマレーシア料理の無限の可能性を体現している。これらの食品に対する時間と空間の変革的な影響は、国境を越えた軌跡、移民の物語、民族のアイデンティティにも深く組み込まれており、その驚くべき適応性と文化的重要性を解明するために徹底的な調査に値する。

第三に、公共の場で食事をする習慣と、都市および地域の空間形成に対する国家の管理との結びつきである。ジャックの家族は中華料理レストランを経営している。レストランの装飾、雰囲気、客層は中国文化と強く結びついており、マレーシアとはあまり関係のない閉鎖的な空間のように見える。このレストランは、マレーシア系華人が味の記憶を通じて祖国とのつながりを維持するためのスペースとして機能している。それにもかかわらず、マレー人はハラールの食事制限を遵守しているため、この中華レストランのような非ハラールの店を利用することができない。イスラム意識の高まりは、1970年代以降の親ブミプトラ政策の実施と相まって、宗教に対する敏感な感覚を高め、マレーの社会監視システムが浸透しているという認識を育んだ。これらの要因は、マレー人と中国人の間の共生性の低下に寄与し、食文化を取り巻く人種化された力関係を悪化させている。

## 報告 2

### カトリック教会から見た「アッラー事件」:マレーシアの宗教間関係についての考察

李光平(上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻)

本発表は、マレー語で神の呼び名を巡る争い「アッラー事件」について、事件の顛末と、カトリック教会やキリスト教徒がイスラームがマジョリティのマレーシア社会でどのような関係であるのかを明らかにするものである。「アッラー事件」は、キリスト教で神を指す際にマレー語でアッラーということばを使用することの是非について裁判所で争った事件を指す。2021年3月、連邦高裁はキリスト教徒が神をアッラーと呼ぶことを禁じた政府命令を破棄し、政府が2023年4月に控訴を取り下げ15年に及ぶ裁判が収束した。キリスト教徒がアッラーを使用することの議論は裁判に端を発したわけではなく、1986年の内務省出版管理部門がアッラーを含めた複数のアラビア語由来の語彙をキリスト教徒が使用することを違法とする政府命令から始まっている。

そこで本発表ではこの「アッラー事件」を取り上げ、主にカトリック教会をはじめとするキリスト教側の繰り広げた言論に着目する。「アッラー事件」については、イスラーム側の言説や、判決をもとにした信教の自由の権利を巡る法学的な蓄積はなされているが、事件を通じてと政府側が控訴を取り下げた後にカトリック教会側に起きた影響については整理されておらず、これらを含めて「アッラー事件」を概観する。

カトリック教会は、歴史的に使用されてきたこととイスラームから見てもその使用に問題がないことを強調し、信教の自由への侵害であると主張した。これらの言説から、イスラームとそれに紐付けられたマレー語は侵すことができない領域となっていることが改めてわかった。マレーシアのカトリック教会ではマレーシア独自のマレーシア語の聖書や典礼が作成されておらずインドネシアのものを使用している。アッラーを禁止する政府命令が破棄され、政府が控訴を取り下げて事件が終結した後、2023年7月にカトリック教会は使用する聖書をマレーシア語聖書に変更することとマレーシア語の典礼書を作成することを決定した。これらの決定の「アッラー事件」との関係性についても課題として触れる。

さらに、現代社会でイスラーム的なものをアイコンにアイデンティティとして見出すマレー・ムスリムと、神の呼び名アッラーを守り紐帯を強めたマレーシアのキリスト教会、そして宗教間関係により深い亀裂を生んだことについても考察する。

## シンポジウム(1)

### 現代マレーシアにおける心と体

#### 趣旨

本シンポジウムでは、情報技術の進展やコロナのパンデミックを経験した現代社会における心と体の関係を、マレーシアから考える。インターネットや情報技術は、人と会う、移動する、活動する人間の身体性のあり方を変え、パンデミックはそれをさらに促進したと見られてきた。しかしパンデミック後の社会では、人と会い、移動し活動することが旺盛さを取り戻しており、このことは身体性が日常生活における心の安寧に欠かされざるものであることを示唆している。多宗教社会として知られるマレーシアの研究では、信仰や思想へのアプローチとして身体的行為としてのヨガ、舞踊、儀礼、呪術、礼拝についての分析が進められてきた。本シンポジウムでは、こうしたマレーシア研究の論者が、伝統医療、都市生活、宗教実践の3つの観点から現代マレーシアにおける心と体の関係に迫る。

#### 報告 1

##### マレー人の体質・気質・食べ物と合うこと(sesuai)の重要性

板垣明美(横浜市立大学)

体は完全に閉じた系ではなく、外部から取り入れる物質や情報を取り入れて常に動いている。マレー語は心と体を一体ととらえたうえで、見える部分を体(badan)と呼び、見えない内部を心(hati)と呼ぶ。マレー人は、体は食べ物など取り込んで機能し続ける機械物的側面としてとらえる。

マレー人は、病や体の不調の要因を4つの要因でとらえ、それぞれに対処する理論を持つ。第1に気理論である。植物や動物の生命を維持するエネルギーを気(semangat)ととらえ、気の低下により病気が起きると考える。気を補うために、手で体に触れてもらったり、気を吹きかけてもらったりするほかに、呪文やコーランを唱えることが有効だと考える。第2に邪霊理論である。自然界に存在する邪霊を害した時に病や体の不調が生じるという考えである。体に気が満ちており調子がよければ、邪霊の被害は起きにくいと考える。第3に身体理論である。身体内部の臓器の状態が病や不調の原因と考える。発熱や熱による痛みを食べ物や飲み物、薬で冷却するといった治療を行う。第4に人災理論である。恨み悲しみを持つ人からの呪術によって病気が発生するという考えで、人間関係に関わるものである。体に気が満ちており調子がよく、呪術を信じなければ、呪術の影響は受けにくいと考える。

マレー人には、体質や気質は一人ひとり異なり、その特性に合う(sesuai)ように体に働きかけることが心にも働きかけることに通じ、そのような気遣いが人間関係にとって重要だという考え方があ。食べ物の好き・嫌いとはわがままではなく、体質や気質に由来するものであるととらえる。好き嫌いを把握して料理をすることは、相手の体と心を気遣う愛情表現になる。一般に男性の体質・気質

は「熱」寄り、女性は「冷」寄りだととらえられる。しかし「この男性は冷症よりだからアッサム・ジュースよりも温かいコーヒーを出そう」、「鼻炎と聞いているので今日の夕飯に海老は使わないようにしよう」など、その人の体質・気質の個性についての情報を蓄積すると、強い冷から強い熱まで無限の多様性の中から適切な対応を取ることができる。これは各人の唯一無二の特性をとらえる知恵となる。体質・気質に合う食べ物や住環境、友人、仕事を選択することが重要であり、選好が合う人といると幸せで健康になれると考える。

以上の分析は、パンデミック以前に実施したフィールドワークに基づく。報告者は 2023 年 8 月末から 9 月にフィールドワークを実施し、共食や触れ合いが復活していることを確認した。本報告では、パンデミック後のマレー人社会における体と心の結びつきも、パンデミック以前の理解を踏まえながら考えてみたい。

## 報告 2

### ヨガ実践から考える身体感覚の解釈と信仰：マレー系・インド系のヨガ指導者を事例として

栗原美紀(共愛学園前橋国際大学)

マレーシアでは、2008 年にヨガファトワーが出された。ファトワーとは、イスラームの教義に関する見解であり、このヨガファトワーは、マレーシア国内のイスラーム教徒のヨガ実践に否定的な所見を示すものだった。この出来事をきっかけに、マレーシア社会におけるヨガ実践の状況は一時衰退したとされる。しかしながら、ファトワー自体に法的拘束力はないことや、州によってもさらに見解が異なることなどから、現在マレーシアにはヨガを実践するイスラーム教徒もいる。そこで本報告では、2017 年から断続的に、クアラルンプールとスランゴール州で行ってきた調査の結果をもとに、マレー系イスラーム教徒のヨガ指導者による、宗教とヨガの関係に対する見方について検討する。その際、インド系ヒンドゥー教徒のヨガ指導者によるヨガ理解も参照したい。それは、ヨガの解釈の問題について、宗教や個人の違いのみならず、身体実践の特性から考えるためである。身体実践の観点から分析することで、マレーシア社会の人々における宗教と個人の精神性の関係を考察することにつながるだろう。

本報告の論点は主として 3 つある。1 つめは、イスラーム教徒のヨガ指導者がヨガを始めるきっかけである。イスラーム教徒はヨガを忌避する傾向があるともいわれている一方で、調査協力者のムスリムヨガ指導者は、フィットネスや健康増進の一環としてヨガを始め、その後ほかのエクササイズとの違いを実感していった。それでは、ヨガ指導者がヨガとほかのエクササイズとを区別する指標は何か、ということが 2 つめの論点であるが、ここでは、ヨガがほかとは異なる精神的な効果・変化をもたらすということが挙げられる。また、ヨガ指導者たちがヨガを始めた当初に、それをエクササイズとして実践していたところから、次第に精神的な側面も含めてヨガとみなすようになっていくプロセスの中に、3 つめの論点として、ヨガと宗教とを区別する指標が浮かび上がる。ヨガ指導者は、ヨガについて感覚・感情という観点から理解していた。したがって、ヨガの当事者的な理解をとらえるためには、ヒンドゥー教とイスラーム教という宗教の対立ではなく、宗教の構成要素である言語と感覚と

いう対立で考える必要がある。これらの結果から、ヨガ指導者は、身体実践を通じて宗教の信仰をより細分化してとらえるようになっているといえる。

他方で、最近ではマレー文化の中にもヨガに似た、心と身体をつなぐりを重視するエクササイズが普及し始めているという。健康やフィットネスへの関心がより一層高まった今日、マレーシア社会においても身体技法を実践する入口は広がっている。そのような状況の中で実践の当事者は、それぞれの技法の習熟度にあわせて、信仰をもつことに対する解釈を多様に変化させていくかもしれない。

### 報告 3

#### マレー・ムスリムにとっての心身の癒しとイスラーム:「共に在ること」の重要性

久志本裕子(上智大学)

本報告では、半島部マレーシアのマレー人ムスリム社会を事例として、イスラームの理解と実践における心と体の結びつきを考える。イスラームの日常の宗教実践を行うことは、それ自体が心身の癒しにつながると考えられている。個人の経験としても、つらいときにドゥアーや礼拝といった宗教的实践によって悩みが解決した例が語られる。だが、宗教実践が精神的癒しをもたらすという規範的語りには、具体的な解決を要する精神面の問題さえも、「悩むのは信仰心や実践が足りないからだ」という問題にすり替えてしまう危険性がある。そこで本報告では、やはりイスラームの実践に結び付きながらもやや異なる次元の事象として、同じ空間に「集まる」「共に在る」ということの重要性を考えてみたい。

まず、イスラームにおける心と体について確認しておきたい。イスラームでは心と体を分けて考えるが、二分法というよりは概念的に分けたうえで両者を不可分のものとして捉える。イスラーム法学は礼拝や断食など外から目に見える身体的行為を細かく規定するが、それらの身体的行為は信仰や意図、理性等を前提としている。他方、「神秘主義(タサウウフ)」の分野は、身体的実践には「心」による行為が伴うべきことを強調し、同時に神の名などを唱えるズィクルのような身体的実践を通じた心の訓練を説いてきた。

このように、イスラームの信仰と宗教実践は「信仰＝心」「実践＝体」という関係ではなく、心と体が一体となって初めて成り立つという基本的な理解がある。このため、礼拝や断食といった宗教実践はすなわち心の純化や安寧に結び付くものと理解される。逆に不安を抱えたときなどは、まずクルアーンを読んだり、礼拝をしたりすることが第一の解決策とされるが、時に悩みを抱えた人にとって模範解答的に過ぎることがある。

これに対し、マレー・ムスリム社会においてより「癒し」に直結しているように見えるのが、イスラームに関連して人々が「集まる」という場面である。集団礼拝や大人数で集まって断食を解くこと、メッカへの巡礼、ハリラヤでのオープンハウスなどイスラームの基本的実践に直結する集まりはもちろんのこと、ムスリムが集まることで喜びや心の穏やかさ(ketenangan)を得る場面は多数ある。モスクや礼拝所などでの学習会、2005年頃以降流行してきた預言者を讃える大規模集会、薄めの神

秘主義色を伴う集会などが主な例として挙げられる。これらの集会に見られる重要な要素は、カリスマ性を帯びた説教師などの存在、集団での歌あるいは朗読と、食事を共にすることである。さらに、イスラームの学びや実践と一見直結しないが「イスラーム的」とされる親族の集まり、病人の見舞いなども、そこで特に何をせずとも「共にいる」こと自体が癒し、ケアにつながる場面でもある。これらの場面からは、マレー・ムスリムにとってのイスラームというものが、目につきがちな規範的語りから少し距離を取った形で見えてくるのではないか。

## シンポジウム(2)

### 混成社会マレーシアにおけるフィールド調査のあり方をめぐって——科研費プロジェクトによる共同研究の経験から

#### 趣旨

混成社会——国民が多民族・多宗教・多言語であるとともに外国籍の定住者や短期滞在者も多い社会——としてのマレーシアを対象とする調査研究では、民族・宗教・言語ごとの専門家による共同研究が重要な位置を占める。本シンポジウムでは、マレーシアにおける過去の科研費プロジェクトによるフィールド調査での経験を踏まえつつ、マレーシアを主な研究対象とする研究者(ホスト社会研究者)、マレーシア以外の国・地域を含む研究者(ゲスト社会研究者)、および現地のカウンターパートとの三者構造に基づいた共同研究をどのように組織し、その研究成果をどのように発表し、伝達すればよいのかを議論する。これは、今後のマレーシア研究にとってきわめて重要な課題であり、人文社会科学のさらなる活性化を目指すことにもつながると考えられる。

ここでの共同研究とは、ある共通のテーマのもとに各担当者が役割を分担して調査を行い、それぞれ研究成果を発表するとともに、ディスカッションを通じて全体の研究成果を得るようなタイプの研究のことをいうが、とくにそのメンバーがフィールドで一定期間にわたり調査活動をともにして知見の共有をおこなうタイプの研究方法をここでは「合同調査」と呼ぶことにする。

本シンポジウムは、1998-2008年度に主にマレーシア・サバ州で調査を行った科研費プロジェクト(代表:宮崎恒二)、およびその経験を踏まえて組織され2016-2023年度に半島部マレーシアおよびサバ州で調査を行った科研費プロジェクト(代表:篠崎香織)が共同して企画することにより、混成社会マレーシアにおけるフィールド調査の問題点を議論する。今日、科研費による調査も基盤研究 C などによる単独個別が増えつつある中で、共同研究とくに合同調査の効用について論じる。それによって、調査研究の組織と成果のあり方を検討し、今後のマレーシア研究の参考に供する。また、本シンポジウムの成果を取りまとめて JAMS 会誌『マレーシア研究』に投稿することも計画している。

#### セッション 1 調査の組織と成果

このセッションでは、混成社会マレーシアにおける調査(とくに合同調査)の問題点をホスト社会研究者、ゲスト社会研究者、および現地のカウンターパートの役割の観点から検討する。そうしながら考えてみたいのは、調査研究をどのように組織し、その成果をいかにして取りまとめ、伝達するのかということである。国内(地域内)に居住する複数のコミュニティ間の相違が大きいマレーシアではコミュニティごとに調査を行うことになるが、「マレーシア研究」として調査が行われるとき、どのコミュニティを調査対象に選ぶのか、また、コミュニティを横断した知見をどのように得るのが問われ

ることになる。このことを通して「地域研究とは何か」という課題を考える。

## 報告

### 合同調査の組織と課題——混成社会マレーシアにおける移民の社会統合研究プロジェクト(2016-2023年度)の事例から考える

篠崎香織(北九州市立大学)

2016年度から2023年度に半島部マレーシアおよびサバ州を対象として、2つの科研費プロジェクトを行った。「多民族国家マレーシアの社会秩序再編における非正規滞在者の役割」(2016-2019年度)と「多民族・多宗教国家マレーシアにおける移民の社会統合——宗教の互助機能に着目して」(2020-2023年度)である。

本プロジェクトは、マレーシアに居住する外国籍者がホスト社会であるマレーシア社会にどのように位置づけられているかを、インドネシア、ミャンマー、フィリピン、バングラデシュ、日本からの居住者を事例としてとらえることを目的とした。とりわけ着目したのは、外国籍の居住者がマレー人、華人、インド人のうち自分と文化的な共通性が高い民族と関係性を構築しマレーシア社会に居場所を確保していくように見える事象であった。マレーシアでは、文化的共通性を持つとみなされた人々を相互扶助と自治の枠組みとする仕組みが植民地期に導入され、そのなかでマレー人、華人、インド人という民族概念が形成され、いずれかの民族に所属することにより資源の公的な配分を享受できるという制度や意識が独立期・国民国家形成期を通じて構築されてきた。こうしたマレーシア社会の仕組みは外国籍の居住者がマレーシア社会で居場所を確保するうえでどのように機能しているのか、また外国籍の居住者との関係性が増えたり深まったりしていく中でマレー人、華人、インド人の内部構成に変化が生じるのか、さらには民族間関係やマレーシア社会全体のあり方にも変化が生じるのか、といった点を主要な問題関心としてきた。

これらの点を明らかにするために本プロジェクトは、マレーシアを研究拠点としてきた研究者と、外国籍の居住者の出自国を研究拠点としてきた研究者により共同研究を組織した。地域研究では現地感覚を得ることが重要であるという理解のもと、ホスト社会であるマレーシアで、またゲスト社会であるフィリピンとミャンマーで、共同研究のメンバーが約1週間にわたり寝食をともにして知見の共有を行う合同調査を実施した。

以上のプロジェクトを事例として本発表では、ホスト社会研究者とゲスト社会研究者との協働がもたらした成果を振り返るとともに、課題についても整理し、話題提供を試みる。具体的には、ゲスト社会の言語や社会に通じたゲスト社会研究者はホスト社会研究者にとってホスト社会に居住するゲストの実態を把握するうえで大きな助けとなる一方で、ホスト社会研究者はゲスト社会研究者の研究にどのような寄与しうるかについて考えてみたい。またゲスト社会についての研究がホスト社会にとってどのような意義を持ちうるかについても考えてみたい。



## セッション 2 非正規移民と調査言語

このセッションでは、2 つの科研費プロジェクトの共通の課題であった非正規移民について考える。非正規の滞在者は逮捕・送還を恐れて表に出てこない傾向が強く、調査が難しいため、そこをどのように工夫して調査するのかという問題がある。ここで鍵となるのは現地語(調査対象コミュニティの間で使われている言語)である。混成社会では複数の現地語が使われていて、使える言語によって得られる情報の種類が違ってくるため、現地語がわかる研究者による調査が重要である。しかし、その一方で、近年では現地語がわからなくても英語だけでも一定の研究成果を得ることができる環境が増えてきている。ここではこうした調査における言語の問題についても考える。

### 報告

#### 非可視化という実践——サバ州在住フィリピン移民の調査の経験から

細田尚美(長崎大学)

フィリピンからの移民現象に着目すると、移動先としてのマレーシアは特異な存在である。フィリピン政府発表の統計によれば、2013 年のマレーシア在住フィリピン人は 793,580 人だった。これは在外フィリピン人の数としては東・東南アジアで最も多い数だった。滞在資格別にみると、最も多いのは全体の半分以上を占める非正規滞在者(448,450 人)で、次に一時的滞在者(319,123 人)、永住者(26,007 人)と続いた。マレーシアは最大の非正規滞在のフィリピン人を抱える国である。

その非正規滞在者の多くはサバ州に在住している。その理由として、サバ州が歴史的経緯の違いから半島とは異なる民族構成がみられること、フィリピンと文化的・地理的に近く、両国間の国境管理も徹底していないこと、両国間の領土問題のため、サバ州には、ニーズは高いと思われるフィリピン領事館がないことが挙げられる。

本報告では、このような特異な状況下で報告者がキリスト教徒のフィリピン移民について行ったフィールドワークの経験に着目したい。報告者は 2016 年から 2020 年の間にサバ州コタキナバル市を中心に延べ 4 週間ほど滞在し、調査を行った。サバ州で調査をしてみて、これまで報告者自身が調査をしたことのある、中東湾岸6か国やアジアのシンガポールや香港などと比べて、サバ州ではフィリピン人にインタビューをすることが難しいと感じた。ライフストーリーの聞き取りができたのは、正規に滞在しているフィリピン人のみとなった。しかし、報告者が現地で会話をしたのはライフストーリーの聞き取りをした人たちに限らない。路上や店内で、フィリピン出身と思われる店員や客にもタガログ語などで声をかけ、雑談をした。調査後は、ライフストーリーを聞いた前者からの情報を基に報告書をまとめたが、前者のみならず後者との相互行為自体にもサバ州に暮らすキリスト教徒のフィリピン移民について知る重要な手がかりがあると考えた。

本報告では特に、フィリピン人の非正規滞在者が多数を占める地域的特性と調査者と被調査者の間で交わされる言語や非言語のコミュニケーションを踏まえて、移民同士で互いの存在を非可視化する日常実践について注目する。多様な背景を持つ人々が共存する混成社会において、法

的立場の違いは調査者と被調査者の関係にいかに関係を及ぼすのだろうか。そして、感覚的に「違う」と思われる人同士が会うときに、使われる言語はどの程度、両者の関係に影響するか。同様に、言語以外の同質性や差異がもたらす影響はどうだろうか。これらの点に関し、フィールドノートにつづった、様々なフィリピンと関係があると思われる人たちとのコミュニケーションの記録を振り返り、考察する。

### セッション 3 調査、生活、記録

このセッションでは、現地での調査者の生活の側面に焦点を当てる。調査者はフィールドで透明の観察者ではなく、生活する主体でもある。現地で飲食し、社交し、生活を営みながら調査する。こうした側面は調査研究と個人の生活を分ける傾向が強い日本の研究環境では、「調査研究」に含まれない部分として扱われることが多いが、調査とは調査フォーマットにそって行われるだけではない。エスノグラフィックな調査／記録にとってはこうした現地生活への参与によって得られる知見こそが重要である。ここでは、調査地で生活者として暮らした経験を持つ研究者が、科研費プロジェクト終了後も調査地と関わりを持ち続け、長期にわたって調査地の変化を観察するという生涯を通じた研究についても考える。

#### 報告

#### 共同研究の積み重ねを通じたマレーシア地域研究の遂行——フィールドワーカーの調査、生活、記録から

小野真由美(立命館大学)

海外のある特定の国や地域を対象とする地域研究の分野では、研究者はその専門的な教育を受ける過程において、長期間の現地調査を行うことを基礎としている。多くの場合、研究者は大学生(学部生)や大学院生の頃に、研究対象地域への渡航や留学を経験し、学位論文執筆のための長期調査／フィールドワークを1～2年にかけて実施する。しかしながら、研究者として常勤の職に就くと、研究対象となる国や地域を教育研究および生活の拠点とする場合でなければ、学生の頃に行ったような長期調査／フィールドワークを実施する機会は非常に限られ、科研費などの研究によって数日から数週間の短期的な現地調査を断続的に行うことになる。本報告では、本シンポジウムを共同で企画する二つの科研費共同研究プロジェクトへの参加によって得られた知見と経験をもとに、調査者／フィールドワーカーの調査、生活、記録について検討する。そのさい、報告者が大学院生として参加した科研費共同研究からの学びの経験と、長期調査の経験をふまえて現在参加しているもう一つの科研費共同研究の遂行という点から、マレーシア地域研究における共同研究の意義を、その積み重ねと連続性のもつ意味を含めて考えてみたい。

多民族によって構成されるマレーシア国民と、様々な国や地域から異なった社会文化的背景(エスニック・バックグラウンド)をもつ外国籍の人々が一時的に滞在／定住するマレーシアは、国

境を越えて流動する人々が織り成す混成社会・ボーダー社会という実像をもつ。その実態を把握するためには、エスノグラフィックな観察を行う研究対象を、鳥瞰的に把握することによって全体的に理解することが不可欠である。そのさい、ホスト社会研究者とゲスト社会研究者の視点の往還に加え、それぞれの研究者が調査地において長期調査を行ったさいに生活者として得た知見や、研究者との学際的な交流の蓄積が(その後の研究における)短期調査を効率的に実施する上できわめて重要となる。そうした点から、共同研究を通したマレーシア地域研究の発展の可能性と課題について考える。